

ソフィストなる名辞とその範圍

堀, 豊彦
九州帝国大学教授

<https://doi.org/10.15017/1201>

出版情報 : 法政研究. 13 (2), pp.85-104, 1943-10-30. 九州帝国大学法政学会
バージョン :
権利関係 :

ソオフィストなる名辭とその範圍

堀

豊

彦

およそいかなる所においても、亦いかなる時代にあつても『賢明』といふことが稱揚せられないことは先づ勘いのであるが、古典的ギリシヤとその時代とは事の外著しく『賢明』を尊んだことにおいて一つの特異性を示してゐる。そこでは種々の物議をかもす程に喧ましく取沙汰せられた所の『ソオフィスト』なる名辭も、その本源的なる意味においては『賢明』なる人、才知ある人、何らか知的に或は知的教養乃至知的才幹において一般大衆に抜んでたる卓越せる人を表象した。茲に謂ふ所の『賢明』とはその場合にあつては社會的實踐的意義において一般に理解せられて居り、即ちそれは政治的技能 (*deinotes politike*) と卓越せる理解 (*drasterios sunesis*) とふことであつた。そこに傳はる七賢人が海中から出でた三脚器を互に譲合つたといふ傳説に依れば、最初にデルフィの巫女はこれを『最も賢明なる者へ』譲ると託宣したといふ。神の巫女の託宣が『最も信心深き者へ』ではなく、『最も賢明なるものへ』であるところには興味深いものがある。さうして、この七賢人のうちに入れられ

てゐる人々も茲に謂ふ所の『賢明』の表象する所に従つて選定せられてゐる向きが強い、譬へば立法者としてソロン(Solon)やピットタコス(Pitakos)が左様であり、またターレス(Thales)がその選に入つてゐるのは卓越せる哲學者としてではなく寧ろその政治活動に依存してゐるものの如くである。⁽¹⁾

かような意味において Solon も Pythagoras も ソフィストと呼ばれた。また秀々たる抒情詩人 Thamyras も同様にその名を以て稱せられ、Sokrates も Aristophanes からばかりでなく、Aeschines から同じくソフィストの名を冠せられた。Aeschines は Demosthenes をも亦ソフィストと命名したが、彼自身は同年代の人 Lyssias から同じ呼び名を興へられた。⁽²⁾ 更にまた Aristoteles は Aristippus の⁽³⁾ 門下であつたが、夫々ソフィストと呼ん⁽⁴⁾ denes を指して——Aristippus も Antisthenes も共にソクテラスの門下であつたが——夫々ソフィストと呼んだのである。かの Platon も Isokrates からはソフィストの名において諷せられ、そのイソクラテス自身はソフィストと命名せられ批難せられたことを恥ぢて、それに對して彼自身を辯明したことがあつた。あらゆる哲學者を辛辣に嘲笑した所の Timon はプラトンやアリストテレスを含めて總ての哲學者をソフィストの名稱において總括して愚弄した、といはれる。⁽⁵⁾ 更に煩を厭はずして言へば、Troezen の Demetrius は Empedokles をソフィストの中に入れ、かのイソクラテスの如きは Empedokles も Ion も Alkmaeon も Parmenides も Melissus も Gorgias をもみなソフィストの名をもつて呼稱した。⁽⁶⁾ こんなにもソフィストといふ名辭は廣く卓越せる人々に對して使用せられたことであつたが、もとよりその使

用せられた意圖や内容には夫々可なりの多様性があつた。併し、ともかくも當代の一般に知性低き人々の知的教養ある人々に對する自然なる情感には、自づから欽仰の念が含まれてはゐたが、そこにはなほ低きものの高きものに對する反感・厭惡といふよりも寧ろ烟たさともいつたものがないではなかつた。端的に言へば、かのソオフィストなる呼稱には溫情や親愛などに欠くる所があり、寧ろ冷然たる趣きがこもつてゐた。

由來アテナイにおける初歩的基本的教育は肉體のための体育と、精神情操のための音樂との二つを主たる部門とした。謂ふ所の音樂とは今日の夫れの如く狹義におけるものではなく、文藝を司さざる九体の女神の分野に互るものであつた。即ち、リラの立琴の彈奏や合唱の各音階部に通曉するといつたやうなことはなく、詩文の聽取、吟詠や、後來ギリシヤ語のやうな語學に發達した語の多くの語句より成れる音節の精確な、さうして優雅な發聲法や、各語の間に互る多様な抑揚等々に練達することなどの可なり多難なことをも含んでゐるものであつた。かように概念の範域が擴大するように、音樂や音樂教師の語も極めて廣汎なる意味を帯びたるものであつた。西曆紀元前五世紀中葉のアテナイにあつては謂ふ所の音樂教師の中に、最も秀れたる才幹を有する卓越せる人々があつた。即ちそれらは、天文學や地理學や物理學を講じ、又教養ある人々の間における種々の問題に關して辯證法的討議を交へ得る能力ある人々であつた。譬へば、*Imprus* や *Agathokles* や *Pythokleides* や *Damon* 等々の如き人々がそれである。所で、*Damon* やその他茲に擧げた人々は、本來的な又正常的なギリシヤ的言葉の意味においても、また後來プラトンがその名に賦與したやうな語詞の意義におけるやうな意味から觀て

も、ソオフィストと呼稱せられるに適さはしかつた。由來本源的には『賢明』なる人々を表象せるソオフィストなる名辭も、何んとなく一味の輕蔑的な小暗き蔭を派生して理會せられるように轉ずるに至つたのである。

斯様な轉生的・轉換的傾向が漸く現はれきたつたのは、およそ西曆紀元前四五〇年以降のことであつて、當時アテナイには多くの修辭家、雄辯家、音樂家が大衆の面前に競合つて出現したのである。夫等の有能なる『賢明』なる知識人・文化人が古來の傳統的意味からも、またその名聲・榮譽が漸く傾き初めた意味からも、ソオフィストと呼ばれたことであつた。この年代のソオフィストと稱せられた人々は他の機會にも述べたように、物的報酬を得て人々を教授した。従つて、彼等は概して好んで富裕なる階層の子弟を多く教授したことは拒む可くもなかつた、かくして巨額の私財を蓄積する者も生じた譯であり、そのことが或る程度一般の人々の嫌惡を招き、また羨望をも挑發した素因の一つであつた。而してさうした擯斥は一般人よりは寧ろ彼等同輩、即ち彼等と同類の生業に携るもの間において却つて強くさへあつた。ソクテラスやプラトンのこの徒輩に對する激しき嫌惡・排撃はもとより一般民衆の夫れよりは高級であり、根據もあつたではあらうが、當代において漸く固定し初めた意味における所謂ソオフィストなる徒輩への蔑視を助長するに舉つて有力であつたことは否定出來難い所であつた。かく物的報酬の所得に對する當代の一般的通念は、後代の夫れから推しては寧ろ奇異的とまで覺ゆる程強烈であつたが、ソクテラスやプラトンにとつてはそのことは尠く共謂はば良心的なる感慨であつたとも考ふ可きであらう。物的報酬の受理につける此種の事態は單に古典的ギリシヤ人のみの特有な現象ではなく、後來ローマの共和政時代、

並に帝政時代初期にあつて、裁判上の辯護に携はつて報酬を受理することは同様に不面目な事柄であるといふ觀念は、ローマ人間における一般的通念であり、また一般的なる感慨でもあつた。實に古代ローマの護民官 *Cincius Alimentus* の制定による *Lex Cincia* (西曆紀元前二〇〇年頃) に依れば、このような謝禮報酬の受理は禁止せられてゐたのであつた。但し、實際的に慣行的には當時、この禁令は必らずしも恒にその制定の如く嚴守せられてはゐなかつたらしい。

ともあれ、報酬の受理は當代においては斯程までに批難の對象であつた。そこで、ソクテラス別してプラトンはこれらの不面目なる徒輩に連らなれる當代の一連の學者を表示するにあつて、ソオフィストの名稱は正しくこれら報酬目標の卓越せる教師に對して甚だ適正なるものであるとなしたのである。實にこの種の學者に對して、この名稱の烙印を押し、それを恰も固定化せしめたものの一入としてプラトンはその第一人者であつたとさへ稱しても差支ない程であらう。しかも、その時代にあつて若しも何人をもつて最も代表的『ソオフィスト』となすか、といふ問ひをアテナイ人に發するとしたならば、恐らくは人々はソクテラスをもつてその第一人者となしたであらうような時代においてのことであつた。それ程當時はこの名辭はプラトンが意圖した程の輕蔑の意味は未だ一般には通用してはゐなかつたし、人々も亦これを斯様な意を以て使用するには至つてゐなかつたのである。プラトンはこの名稱を概して彼の敵對者、即ち報酬を受理する所の學者・教師に對して固着せしめる可く努めたと共に、それに附隨的に本來本源的にはその名稱には内含せられず、またそのものに隨伴せる漠然たる厭惡の感情と

は全く異なる所の、不面目なる諸種の屬性を賦與した代表者でさへあつた。この點に關してはアリストテレスも同斷であつたが、彼はその點プラトンの見解を踏襲したとみられる。而してアリストテレスに依れば、ソオフィストとは恰も修辭家乃至辯證法論者と同様な實力や見識を有する人々を意味したが、ソオフィストは後者に比しそれらの知識や實力を邪しまなる目的の故に悪用せる輩であつた。即ち曰はく——ソオフィストとは人々を瞞着し且つ金錢を拾得せんことを目的とする所の山師的なる似非知識人である——と。⁽¹⁰⁾

二

知的教養的業務に關與して物的報酬を受理するといふことはギリシヤ正統哲學者達に斯程までにも嫌惡せられたが、併乍ら、知的教養的業務にたづさはつて利得を收めるといふことはギリシヤにあつては決して強がち稀有な、異狀なことであつたとのみはいはれない。譬へば、*Phaidias*⁽¹¹⁾の如き前五世紀のギリシヤの第一流の彫刻家で、この國人の神聖視せるアクロポリス丘上のパルテノン祠再建造營の工事監督をも勤めた程の人であつても、報酬を受理してその制作せる彫像や塑像を賣却した。また、抒情詩人として令名高かりし *Pindaros*⁽¹²⁾(522—448B.C.)も報酬をもとに創作して生計を營んだと傳へられてゐる。同じくギリシヤの抒情詩人 *Simonides*⁽¹³⁾(556—468B.C.)も、更に又ギリシヤ三大悲劇詩人の一人と稱せらるる *Sophokles*⁽¹³⁾(496—406B.C.)の如く家門も秀れ、富裕なる家に人となり、單に詩人として高名なるのみならず、社會的にも高き地位を與へられ、大使として國外に派遣せ

られたこともあり、且又二度までも武將の任命をも受けたこともあるといふような、その人にしてなほアリスト
ファネスの記す所に従へば、所得の追求の爲めには極めて異状なる熱意を示したといふことである。この様にこ
の國にあつても當時金錢の授受については他の事例も決して乏しくはなかつたのである。ただ、友人・朋輩との
談合や相互間の切磋琢磨によつて知能の啓發或は誘掖に資することにあつては金錢の受理は輕視せられ、奇矯な
る嶄新なる言説を弄して高額の資を求めることは可なり激げしく罰せられたものであるらしいが、斯かる友人・
朋輩間の間柄のことをいひ、また後者における相互扶助的啓發といひ、これらに關しては單に古代ギリシヤにお
いてのみならず後代においても亦現代においても大いなり小なり變ることなき事態であり、また事理でもあるで
あらう。當時ソクラテスは、彼等がソフィストと稱呼して蔑視した人々が物的報酬を受取つたことを、あの様に
も激しく擯斥したことであつたが、彼やプラトンはこれと本質的には大差ないであらうような他の知的文化的行
爲がひとしく所謂不面目なる物的評價の下に金錢授受を以て行はれてゐたことには深き注意を拂はなかつたので
あらうか。總じて彼等は凡そ自由人にして他人の願使に唯々諾々たる者を墮落せる者として侮蔑したが、彼等の
所謂ソフィストは知識の教授或は特殊的技能の傳授によつて生活を營んだのであり、これらは彫刻家や詩人が報
酬による契約の下に制作し、作詩しつとも別段探く危まれず見過されたものの如くであつたと考へられるが、ソ
フィストの行爲はこれらの夫れと比較して果して謂はるるが如くに、しかく隸屬的であり、しかく輕侮に値する
業体なのであつたらうか。⁽¹⁵⁾

ともかくにも、『賢明』なる一世に拔出たる人々一般に廣く通用してゐたソオフィストなる名辭が、金錢・報酬を支拂はれたる教師・知識人として皮肉に諷刺的侮蔑の意を以て世人の白眼と冷笑とのうちに理會せらる可く轉生したといふことは、彼等の生活環境や時代の態様や又彼等自らの不徳と劣性等もさることながら、また有力なる人格のひたむきな排撃的努力に基因する所も亦多大であつたと言はなければならぬ。爾後ソオフィストとはその本源的原始的意義を喪失して報酬を支拂はれたる惡魔的教師の意において通用するを一般とするに至つたのである。しかくソオフィストなる名辭の意義は變移した、それは西紀前四・五世紀のことに屬する。斯様にその名稱の意義や評價の低下せる時にして、しかも自らソオフィストと号して恬澹として恥ぢざるのみか、却つて寧ろその名稱を自ら堂々と揚言して自負せる最大なるものは蓋し Protagoras であつた。プラトンの對話篇『プロタゴラス』はこれを次の如き趣旨において興味深く敘してゐる。

即ち、當代第一の知者との聞え高かりしプロタゴラスが會々巡遊してアテナイに來たつたとき Hippocrates なる若者がその示教を仰がんことを熱望して、ソクテラスに請ふてプロタゴラスの許に同道し紹介せられんことを願ふといふのが、この對話篇の筋書の初めをなすのである。而してこの對面にあたつてはプロタゴラスが甚だ莫大な自負に充てる態度をもつて應接する模様が敘述せられて居る。そこで、彼は自己をソオフィストと名乗つて憚らない所以を冗長に語るのである。即ち

……………一箇の他國人が大都市に乗込んでその都市の青年の花とも言ふ可き人々に、己のが教説によつて其人々を進歩向上せしめんがためにその老若、近親、知友を去つて己れと起臥を共にせんことを勸説することは深く用心を要することである、何となればその所作は時に人々の大いなる嫉妬反感を招くことがあるからである、……………聊々ソオフィストの學術はその沿革が極めて古く、古代にあつてこれを行ふ者はその嫌忌せられることを恐れて種々の名稱の下に隠れて自らを晦ましてゐた。譬へば Homer や Hesiod や Simonides の如く詩人に假扮するものがあり、Orpheus や Musaeus の如く祭司や豫言者に假扮するものがあり、或はタルンツム人 Iocens の如きは体操教師の如きものに偽装するものさへあつた。或は極く最近でも、以前はメガラ人であつたが今はセリムブリア人である Heronius も亦同様で、彼こそは第一流のソオフィストである。また貴國人たる Agathocles は音楽者を装つたが、彼も亦正しく秀出せるソオフィストである、更にケオス人 Phthocleides やその他にも此種の人は尠くはない。さうして皆之れ余の言へる如く、人々より猜疑・誹謗を受けることを恐れて種々假扮したのである。併し、これは余の採る所ではない、何となれば余は彼等はその假扮の目的を貫徹し得ないと信ずるからである、即ち彼等はかくして政府を欺かうとするのであるが、政府は彼等に依つて目を眩まされるものではなく、而して民衆に至つてはもともと何等の理解力を有せず、只政府の命する所に追従するものに過ぎない。……………そこで余は全然反對の進路をとり、自らソオフィストたること及び人間の教導者なることを公言するものである⁽¹⁶⁾と。

西紀前四・五世紀、既にソフィストなる名辭の意義が傾きて固定化せる時代において、その名を以て人々から呼稱せらるることさへ事の外、卑下を感じた當時自らソフィストと豪語したことは如何に彼が自己の學識・識見に自負せる所が多大なりしかを窺知し得る。かくてプロタゴラスは自己に師事するものは、『初對面の其日より、その來たりし時よりも進歩したる人となりて家路に歸るを得べく、第二日は初日より更に一層賢明となり日々必らず其前日より進歩するであらう』と揚言してゐる。また、彼自身の教導の性質を語つて、『……人は余の許に來たるならば、その學ぼうとする所を學び得るであらう。即ち、それは公私の事につける思慮であり、人は最上の方法において一家を齊ふることを學び得るであらう、さうして人は國家の事項に關して最も良く辯説し且又行動することを得るであらう』⁽¹⁸⁾と述べてゐる。

既に知られたる如く、この時代においてはその本來的意義と評價とを歪曲、低下せしめられて、ソフィストと言へば金錢を支拂はれたる教師として輕侮擯斥せられた時代に、尠くも自らその名を呼号した者は蓋し彼以外にはあるまいと思はれる。プロタゴラスはその哲學においても、その政治哲學においても、亦その政治學理論においても慥に當期の所謂ソフィスト中第一人者であつた。それらの課題は本稿とは自ら別箇の主題であるから、われわれはそれらへの言及は今は差控へなければならぬ。さて、プラトンはその生存せる年代から推定して親しくプロタゴラスを知つてゐたとは考へられないが、後者の人物、人格並に學識、才幹等々に對しては可

なりな尊敬さへ拂つてゐたものの如く考へられる。⁽¹⁹⁾ プラトンのソオフィスト攻撃の重要な理由の一つたりし報酬受理に就いてプロタゴラスに關しては他に異説もあつたが⁽²⁰⁾ プラトンはこの點でプロタゴラスが比較的恬澹であつた趣を記述してゐる。即ち、對話篇『プロタゴラス』のうちでその人自身の口説として次の様に語らしめてゐるのである。曰く——『余は余の門弟にその金額に價するものを授ける、而して門弟等は金額以上のものを受けたと自ら言明してゐる。故に余は次の様な報酬規定を設けてゐる、即ち——人もし余の門弟となつて、彼も好むならば余の價格を支拂ふがよい、併しこれは決して強制ではない。而して彼もし之を好まないならば、彼は只神殿に詣ふでて余の教導の價格の宣誓をなし、彼等の價値と宣するもの以上のものを支拂ふには及ばない』——と。茲にはそのこと自体所謂ソオフィスト的な街學的口吻が漂つてはゐるが、プラトンをして斯く記述せしめてゐる所は單に彼一流の逆說的諷刺としてのみ之を理解すべきではなく、寧ろそこにはその點に關しての所謂ソオフィスト一般に對する、彼獨特の辛辣さをプロタゴラスに對してはいささか留保せる趣が存するといふ風にも受取るべきものではあるまいか。

三

さて、プラトンには『ソオフィスト』と題する對話篇一篇がある。本小稿は上來説述せる所からして當然、その對話篇につき簡單にても言及しなければならぬであらう。その一篇の主題はソオフィストの性格並に彼等の辯論の

方法を探索追求し、ソフィストの學術、即ち後來ソフィステイケー（詭辯術）と呼ばれしものを批難論破することをもつて主体的課題とし、これに關聯して『非有』の性質の考究が課題として含まれてゐる。その篇はプラトンの著作年次から言へば晩年期に屬し、⁽²²⁾ 對話篇構成上にも夫れ以前の對話篇とは異り、對話人物として殆んど常に登場せしめられて主役を演じてゐたソクラテスが茲では退引して Parmenides 及び Zeno の門弟たるエレアの外人が之に代つてゐるのである。このことは蓋しプラトンがエレア學派及びメガラ學派に接近しつつあることを示唆すると共に、彼が既にソクラテスの學說の影響の範圍より脱出せる趣きを暗示するものである、とも言はれる。⁽²³⁾ もし夫れ斯くの如しとすれば、そのソフィストにつける論證においてわれわれの觀取すべき點は、單にその標題が示すといふ粗笨的な勘考からのみではなく、プラトン独自の見解が他の對話篇におけるよりは、より精確に表明せられてゐるものとして解さねばならないのかも分らないといふことである。なほ、この篇において、ヘーゲルはプラトン哲學の花冠と極致とが存すると認められたもの如くである、と Jowett 教授は評してゐる。⁽²⁴⁾ 併しその對話篇の詳細なる論述は他の適當なる機會に譲るとして、茲には上來述べきたりし論述の範圍に關聯して、單にプラトンがソフィストの性格に賦與した規定的な見解を敘するに留めたいと思ふ。

そこでプラトンがこの篇の中でソフィストにつける多くの探索追求の末、論斷する所を Jowett 教授は次の如く要約して説述した。

即ち、ソフィストとは錯覺術の大家 山師 (Charlatan)、異邦人、瞞着精神の權化 (The prince of esprits-faux) で

あり、教師には非らずして被備者であり、さうして如何なる觀點からしても眞の教師の反對なる者と看做さる可きものである——と。プラトンのこの對話篇における對話の道行は要するに斯様に摘要されるように進行するのであるが、然るのちプラトンは結語的にソオフィストにつき次の如く語るのである。即ち、

(外來の客人) ——……之れを何と呼ぶ可きであらうか、哲學者か、それとも『ソオフィスト』であらうか。

(テアイテトス) ——彼は決して哲學者ではあり得ない、何んとなれば吾々の見解では彼は無學であるからである、併し彼は知者の模倣者であるからして、『ソフォース』(賢明なる)なる語の適用によつて形成せらるる所の名稱を有すべきであらう。然らば吾々は何んと命名すべきであらうか。余はいささか自信をもつて彼をこそ眞の正しく『ソオフィスト』であると稱して決して誤謬ではない、と思ふ。

(外來客人)………

(テアイ)………

(外來客人)………彼は自己矛盾を惹起せしむる技術の、故意なる或は欺瞞の部類に屬するもので、外觀を粉飾する模倣者である、而して幻影製作術の一部類たる幻想術の一種から別れて他の創作の一部類であり、また言語上の奇術師である、神爲に非らずして人爲的製作者である、——まことに正直正銘の『ソオフィスト』とは斯かる血屬、系統のものであると斷言するものは眞に眞理を語るものである。

プラトンはこの對話篇において、即ち、或る學者 (Jowett) の評する所に従へば彼自身獨自の見解に立脚する

こと漸く顯著となれる時期の作品において、『ソオフィスト』を斯様に規定したのである。しかもその篇がその題名からしても判明する如く、『ソオフィスト』を正面から採上げて探求論斷したものであつただけ彼にありてはこの規定は決定的なるものであるとして一應は把握しなければならぬであらう。併し他面、彼はこの對話篇『ソオフィスト』よりは遙か前年の著作たる對話篇『ポリテイア』（理想國家篇）において、前者におけるよりは寛容なる語調をもつてソオフィストに對する一般衆論から、恰も彼等を辯護するが如き所説を試みたことがあつた。即ち

曰ふ――

『……貴君（この篇におけるソクラテスの對談者 Adimantusを指す――筆者註）は人々が屢々言ふが如くわが國の青年が『ソオフィスト』によつて腐敗せしめられたとか、或は個々のこれらの教師達が語るに足るだけに青年等を墮落せしめたとかいふことを考へらるるや。實に、これらの事どもを語る所の公衆こそ却つて一切の『ソオフィスト』中の最大なる『ソオフィスト』ではあるまいか。……』²⁵⁾

一般的にいつて、プラトンは對話篇『ソオフィスト』その他を著した晩年期よりは著しく激しい氣魄を示した壯年時代に、就中最も理想主義的理念の光芒を發揚した『ポリテイア』篇において、ソオフィストに對する態度が前者に示されたるよりは緩和であるといふ點は、われわれの興味を惹くものがある。このことに關しては解釋は種々に與へられるであらう。ただ彼がソオフィストを是認したといふ意味ではないことだけは多言を要さない。

一代のプラトン研究の權威たり！ B. Jowett 教授はその輝かしき名譯本、『The Dialogues of Plato』第四卷に收

めたる『ソオフィスト』篇の翻譯に對する解説・註釋として、この間の事情に亘る彼の見解を次の如く解明した。——即ち、プラトンは青年を腐敗せしむるといふことに關しては、如何なる個人も一般輿論に比すれば到底比較すべくもない程その力が薄弱である、とも考へてゐた、従つて彼は『ポリティア』篇における言説においても毫もソオフィストを是認したのではなく、却つて彼等の力を輕蔑すべきものとして描出したに過ぎなかつた、彼等は恐る可きものたるよりも寧ろ輕侮す可きものであり、その點、一般大衆と變りなく卑しきものである、と考へた。併し、苟も一般大衆より優秀である可き筈の教師や政治家にして、しかも一般人と選ぶ所なきが如き輩こそは正しく非難せられて寧ろ然る可きであるかと考へた。或はこの點は他の觀點から觀れば、プラトンに取つての強敵は『世間』であつたといふべく、それは強がち哲學的意味からではないが、又それかと言つて夫れと全く異りたる意義からでもないが、實に『世間』こそは眞理を厭ひ、外觀を愛好し、知識よりも利得と快樂とを追求するに汲々とし、黨を結んで少數の善人や知者に對抗し、何ら眞の教育を念とする所がないからである。この種の生物は修辭家、法律家、政治家、詩人、ソオフィストといふ多くの頭を所持する。併し、ソオフィストは *Proteus* (神話の海神——筆者・註) の如くこれら凡ての形狀に變貌し、凡て爾餘の欺瞞家達はこのソオフィストの内に自らを收縮して存在するものである。—— *Jowett* はプラトンの意圖をこの様に理會してこの間の事情を斯様に解明したのである。⁽²⁶⁾ これも慥に一つの優れたる解釋ではあるであらう。われわれはこの事態につき、併し乍ら、必らずしも全面的にこの解釋に従ふ必要はない。實にソオフィストと呼稱せられし人々は實際上決して同一の、乃至同類

の主義や學派を形成したといふが如き、何等かなる徒黨や集團を結成した譯ではなかつた。或は一般社會からは等しくソオフィストと呼稱せられ、またかく理會せられた人々の間においてもその思想・學說或ひは技術等々の上では別段相互的連繋があつた譯ではなかつた。端的に言へば、彼等は寧ろ孤立なる人々であつた、従つて假令一様にソオフィストの名稱を冠せられてゐた人々の間にあつても、寧ろ多様性こそその實情であつた。従つて特定の所謂ソオフィストが觀察や批判の對象として採上げられし場合、そこにその評價や解義の類同が存さない場合が生じたとしてもこれ亦止むを得ないことであり、寧ろそれは當然なることであつたとさへ言はなければならぬ。

轉じてまた、對話篇なるものはその性質上、所謂科學的學術的論說とは自らその軌を一つにはしない。従つてプラトンの前記二つの對話篇中の敘述に纏はれる種々の解義に關して、所謂科學的分析的檢討を促がす程の必要性は必らずしも恒に存在しないであらう。斯かる觀點からも亦、ソオフィストの多様性と共に彼等に對する解義、認識並にその評價等の多岐性の所在が肯定的に承認せられて別に差支ない筈であらう。そこには慥に論理の矛盾はない。まことにソオフィストとは決して單一的立場や主義に立脚して、單一的集團を結成したといふような人々ではなかつたのであつて、その點は特に *Chorē* に俟つまでもない²⁷⁾。従つて彼等には行動を共にするといふ團體性もなく、又彼等自ら團結して當代の啓蒙的なる社會的文化的運動を計畫し或は之れを意識的に遂行したのではなかつた。彼等は前述の如く、寧ろ孤獨的で各自夫々の立場・志向において時代の要求する諸種の知識及び技術を教授したものであつた。斯かる諸種の個別的業績が謂はば偶々時代の啓蒙的傾向に直接間接に影響する所が深

甚であつたが故に、史家は彼等を指示するに時として當期の啓蒙運動の主動者として表明するにすぎないのである。また他の機會にも述べし如く、⁽²⁸⁾ 彼等は概してアテナイ人ではなく、多くは他郷の人々で夫々その郷關を出でて當時の文化の中心地アテナイに移りて居住せる人々であつた。この意味からも彼等の間には團體性が稀薄であつたことが容易に推定せられる。またその業務乃至生業といふ點から言つても、彼等のうちでは當代の社會が最も要望した所の廣義における政治學的知識乃至政治的技術を授ける教師たるものが、先づ以て最も普通であり且つ多數でもあつたが、併し、この外に、詩人、音樂者、醫者、体操教師、等々として世に立つものも尠くはなかつた、斯様にその講じたる學科並に技能の種類も可なり多種多岐に亘つたのである。⁽²⁹⁾ 更に時として同一人にして多岐なる才能に長じ多種の業務に携はりしものさへあつた。譬へば、Hippiasの如きは詩人であり、數學者であり、神話解説者(Mythologist)であり、或は又道德家であり、音樂家であり、美術觀識家(Connoisseur in art)であり、歴史家であり、同時に政治家であり、且つあらゆる方面における能文家であつたと言はれる。⁽³⁰⁾ 以上述ぶる如く、ソオフィストとは單一なる主義・立場を有する學派や集團を構成したるものではなかつた。さうしてソオフィストなる名辭も亦斯様な意味における單一性を内含してはゐなかつたのである。茲において、これら諸々の事情を綜合して考ふれば、かのプラトンの前掲二つの對話篇中において夫々紹介せられしソオフィストの性格並に性質に關する相違せる解義に纏はれる解釋の問題の如きは、別段深き意義を伴ふものではないとも考へられよう。まことにソオフィストとは上來顧みたるが如く多様な多義なる意義を内含する名稱であり、また歴史的にその意

義の上にも變遷・變化をみたる名辭であつた。そこでもし強ひてその概念的形式的規定をつくるとすれば、ソオ
 フリストなる名辭は一方においては『哲學者』から、他方においては單なる『音樂者』、『詩人』、『藝術家』等々
 並に手工業者、勤勞階級者、更に奴隸から區別せられたる者にして、當代の廣義的意味における政治的要求はじ
 め社會生活一般に關する教養を授けた所の教師を表象するものであつた、とでも定立すべきであらうか。さうし
 てそこには報酬を支拂はれたる教師といふ小暗き形象が附纏へるものであつたことはもはや繰返して言ひ添へ
 る必要はあるまい。併し、その思想、哲學、學說、その他内面的並に外面的要素・業体の諸々のものをこめて、
 そこに彼等の間に一種の類似性、類同性がなかつたか否か、といふことは自ら別箇の事体に屬すると言ひ得よう。

【註】

- (1) Burnet, G., Early Greek Philosophy, P. 46. 原隨田、ギリシヤ史研究第一、四二一—四二三頁、昭和十七年
- (2) Lysias, Fragmente, 2.
- (3) Aristoteles, Metaphisik, iii.
- (4) Xenophon, Symposium, IV. 1.
- (5) Diogenes Laertios, K, 65.
- (6) Isokrates, de Permut, s. 288.
- (7) Platon, Protagoras, 316 D.; ditto, Laches, 180 D.
- (8) 本誌前號拙稿『ソオノムスト文献考』參照
- (9) Saleny, Ueber die Lex Gincia. (Zeitschrift f. Geschichte u. Rechtswissenschaft, IV. 1. 1. ss. 1-59.)
- (10) Aristoteles. Rhetorik, I. 1. 4.

(11) Phaidias 神像彫刻を得意とし理想像の完成者、言はる、彼の最大の傑作はオリンピア神殿のゼウスの巨像である。純粹のアテナイ人でペリクレスの友人

(12) Pindaros ポイオチアの生早くから戦勝頌歌を以て名をなしサラミス戦勝以後詩壇隆昌にのり神の讚歌、頌歌、行進歌、挽歌等を華麗なる詞で綴つた。その頌歌は調子の高きのみならず神々への信仰が力強く歌出されてゐることを以て人々に喜ばれた。

(13) Simonides キオスの生れ、アテナイに長く居住した。ペルシヤ軍侵入頃から祖國の勇士を讚美する詩を作り頌歌、挽歌、箴言歌、合唱舞踊歌等にその才能を示し詩の競技において屢々優勝した。

(13、2) Sophokles. 幼時より音樂舞踊に長じニハオの時ディオニュッス祭禮の悲劇競技に當時五七才の老詩人アイスキュロスを負かして第一位を獲得し、その後六〇年間詩人としての名聲を保持した。個人的には信仰篤く性質溫良で人々に愛好せられた。平和愛好者でプラトンがこの点を『ポリティア』篇第一卷三二九に一つの追想として遺してゐる。しかも富裕で終生アテナイを去らなかつた。それは他の詩人の如く他國の官延を求めて歩く必要がなかつたからである。

(14) Aristophanes, Pax, 697.

(15) Benn, A.W., The Greek Philosophers, Vol. 1. P. 103, 1882.

(16) Platon, Protagoras, 316-317. (B. Jowett tr.), the Dialogues of Plato, vol. 1. pp. 137-138, 3. ed. 1924.)

(17) Platon, *ibid.*, 318. (op. cit, p. 139.)

(18) Platon, *ibid.*, 318. (op. cit, p. 140.)

(19) Platon, *ibid.*, 309-316. 参照

(20) 本誌前號拙稿、前掲、参照

(21) Platon, Protagoras, 328. (op. cit, P. 149.)

(22) Zeller, E., Grundriss der Geschichte der griechischen Philosophie, ss. 151-152, 13. Aufl., 1928.

(23) Jowett, B., The Dialogues of Plato, vol. III. P. 284. 3eol. 1924.

ソオノイストなる名辭とその範圍

- (4) Jowett, B. *ibid.*, P.284
- (5) Platon, *Politeia*, vi, 492. (Jowett, B., *The Dialogues of Plato*, vol. III, P. 189, 3. ed. 1924.)
- (26) Jowett, B., *The Dialogues of Plato*, vol. III. P. 287. 3. ed. 1924.
- (27) Grote, G.. *A History of Greece*. vol. VIII. (Everyman, s. Lib.) pp. 332-334.
- (28) 本誌前號掛稿題譯參照
- (29) Gomperz, T., *Griechische Denker*, Bd, IS. 343, 4. Aufl., 1922.
- (30) Barker, E., *Greek Political Theory*, p. 58, 1925.